

日本語学と国語教育学との関わり

－柳田國男について－

THE RELATIONSHIP BETWEEN JAPANESE LINGUISTICS AND NATIONAL LANGUAGE EDUCATION

－ABOUT KUNIO YANAGITA'S STUDY－

吉 田 雅 昭

Masaaki YOSHIDA

キーワード：日本語学、国語教育学、柳田國男、一国民俗学、方言学

Key words : Japanese Linguistics, National Language Education, Kunio Yanagita, National Folklore, Dialectology

要 旨

本論では、日本語学と国語教育学との関わりについて、柳田國男の考えを通して考察を行った。柳田の著した「蝸牛考」は、一国民俗学的思考に基づき、ある単語の地域的な広がり、通時的には日本語の単一性を示していると述べている。また、学問領域において、一国という境界を定めることが柳田の説では極めて重要であった。そして、彼の国語教育についての考えは、日本語の多様性を研究しながら、国内の話し言葉の統一を志向したものであることを述べた。

Abstract

In this paper, I discussed about the relationship between Japanese linguistics and national language education through Kunio Yanagita's hypothesis.

"The Snail" that was explained about Yanagita's hypothesis, based on the thought of national folklore. This book hypothesized that one word's regional spread shows the Japanese diachronic unity. And about academic disciplines, fixing the boundary between countries is so important in Yanagita's study.

I would suppose that Yanagita's national language educational theory intends standardization of Japanese spoken language while studying Japanese variation.

1. はじめに

本論は、日本語学(国語学)と、日本で行われている国語教育学との関係について、過去の事例を基に考察する試みの1つである。

日本語について研究する学問分野の呼び名として、国語学と日本語学とは同じ意味合いで使用されることも多い。かつては国語学と呼ばれていたのが、徐々に日本語学という呼称に移行しているのが現状である。教育分野だと、日本語母語話者向けでは国語教育、非日本語母語話者向けでは日本語教育と呼ばれ、その棲み分けは明確である。

国語学会(2004年に日本語学会に改称した)の学会誌である『国語学』の第1号は1948年に発行されているが、その中に「国語教育について」という論文が載っている。その後も発刊後しばらくは国語教育に関する論文の掲載が盛んにあり、また学界の展望号でも「国語教育」の項目が設けられていた。しかし、国語教育の項目は1966年の第65集に設けられたのが最後で、次の展望である1968年(第73集)以降設けられていない。その前号の第72集(1968年)は時枝誠記の追悼特集となっている。国語教育に多大な関心を抱いていた時枝が死んだことで、その後の国語学会においては国語学(日本語学)と国語教育との切り離しが進んだといえる。なお、時枝誠記は戦時中から戦後にかけて東京大学国語研究室の教授として国語学と国語教育学に大きな影響を与えた人物である。

『国語学』では何人かの追悼の記事が書かれているが、中でも国語教育との関連の深い人物として、柳田國男が挙げられる。国語教育の業績が大きい国語学者は他にもいるが、国語教育全般について論じたり積極的に教科書を編集したりと様々な足跡を残し国語教育学の側からも取り上げられるのは、柳田國男と時枝誠記の二人である。それは明治図書出版から発行された『現代国語教育論集成』に柳田と時枝が取り上げられていることから分かる。その他は、斎藤喜博や西尾実などの国語教育の現場出身者が主である。

本論で主な考察対象とする柳田國男は、これま

でも様々な観点から研究されてきた人物であり、一般的には民俗学者として知られている。柳田は元々農政を中心に活動していた官僚であり、時枝のような国語学プロパーの専門家ではないし、学校教育者でもなく、本来的な意味での日本語・国語教育研究者とはいえないのかもしれない。

しかし、戦後には国語や社会科の教科書の編集を行っており、国語教育の世界との関わりが深い人物である。そして、カタツムリ(蝸牛)の呼び方を題材に方言圏論を打ち立て、国語学(方言学)に関する影響も大きい。後世への影響の大きさから見ても、日本語学と国語教育学との両方の文脈から論じる際の代表的な一人といえよう。

日本語学は、日本語の実態を様々な角度から研究する学問であり、歴史を含めながら、日本語をそのまま把握し、理解しようとする分野である。国語教育学は、その中核を国語科教育が占めるように、学校という制度の中で成立する学問という性質がある。また、そこで教授される日本語は、国が国民として必要と考える、教育的目標と合致した範囲内の日本語である。この二種類の学問は日本語という同じ言語を基盤としつつ、異なる課題を有している。しかし、文法教育や作文教育など、日本語学的基盤を必要とする国語教育の領域もあり、時枝や柳田のように日本語学と国語教育学の両方で活躍した人も存在する。

国語教育学が自立した学問として存在するに伴い、日本語学との関わりが薄れた印象はあるが、国語教育学の成立や発展に国語学(日本語学)は少なからず影響を与えており、現在でも共に関わりの深い研究分野である。この関わりの歴史を見つめ、あらためて日本語学や国語教育学といった学問がどのような背景を背負っていたのかを考え、日本語に関わる研究や実践の全体像を問い直すことにつなげていきたいと思う。

そして、言語(本論の文脈では日本語を指す)に対する何らかの考え方があったとして、それが現実の教育にどう生かされるのか、日本語を舞台として考察を試みる。こうした考察にふさわしい学者は、特に戦前には様々な存在するが、ここではそ

の考察の始まりとして、柳田の日本語学(方言学)がどのようなものだったかを、柳田の学問の中心だった民俗学と絡めさせながら考えていく。それから、彼の国語教育の議論について検討する。

2. 柳田の日本語(方言)研究の在り様

柳田の日本語研究の成果としては、2014年に柳田の方言学に関する本が出版されているように、現在に至るまで影響力の大きい業績が、方言学の分野である⁽¹⁾。言うまでもなく『蝸牛考』による方言圏論の業績を主に指しているのだが、柳田が携わった多くの研究テーマは、特に後期では民俗的内容が主立っている。広く言うと民俗学的関心の中にも方言学的業績も存在したと捉えられる。圏論を基盤とした柳田の方言学説そのものに、蝸牛考以降、主立った進展は見られない。

蝸牛考とは日本各地のカタツムリの語彙について調べたものだが、この書物は、フランスの言語地理学から方言伝播の考察の影響を受け、日本の方言へと応用させたものである。蝸牛考の成立については岩波文庫版『蝸牛考』での柴田武の解説が詳しい⁽²⁾。柴田は方言圏論という名は柳田の創案だが考え自体は19世紀のドイツに見られることを指摘した上で、次のように述べる(p225)。

確かなことは、若いころに農政学徒として読んだ農業経済学の古典、チューネン『孤立国』に出ている「農業経済学的領域図」が頭にあり、その後、一九二二年から二三年にかけて国際連盟委任統治委員会の仕事でジュネーブにいたとき、ジュネーブ大学のE・ピタル教授の人類学の講義でA・ドーザの『言語地理学』を読んでいることである。

柳田の学問形成におけるジュネーブ体験は非常に大きなものがあり、後でも触れるが、ここでは言語地理学との出会いが意味を持ってくる。

あらためて述べると、蝸牛考とは、カタツムリを指す語彙を全国的に調べた場合、京都を中心に同心円状に言葉の伝播が認められることを述べている。そこから、文化の中心だった場所から同じ言葉が広がっていくことで、同じ種類の語彙が都

からの距離に応じて各地方に定着していく現象が認められることを論じた書物である。

蝸牛の語彙を単純化すると次のようになる。

①東北地方北部、九州西部→ナメクジ

②東北、九州→ツブリ

③関東、四国→カタツムリ

④中部、中国→マイマイ

⑤近畿地方→デデムシ(デンデンムシ)

ここで、京都が伝統的には日本における文化の発信地であり、文化の中心地から新しい語彙が生まれ、各地方に伝播していくと考えると、日本語において蝸牛に関わる語彙は、①～⑤の順番で発生したと考えることができるわけである。

そして柳田はこの現象が日本語史において、全般的に当てはまると考えた。この考えからすると、各地域に存在する方言的な現象は、元をたどれば1つの場所、1つの事象に収斂することになる。

蝸牛考では次のように述べられている。

従来の方言区域論においては、単に日本の中央部に近く、やや著しい一つの堺線のあることばかり注意せられて、それが他の一方の側ではどういう結末を示しているかということまで、考えてみないのが普通であったようだが、言語の地方的異同が曙染などのごとく、漸次に国の片端から浸潤して来たであろうという想像には、実は是認し難い幾つかの論理の跳躍があった。第一にはこの二千年に余る国内移動の傾向は、いつでも中央部の人多き地域から、四方の辺土へ出て行こうとしていたことを忘れている。(岩波文庫版 p109)

人が中央部から周辺へと移動したことを述べながら、それぞれの地方(片端)から言葉が広がったという考えを、是認し難いとして否定している。日本の方言とは、統一されていた1つの言語現象(日本語)の、時代による変遷が、地域的な違いとして出現した事象と捉えられることになる。

上述の引用では、方言区域論一方区画論を意味する一に言及しながら、各地域における言葉の誕生を否定している。また、複数の地域で言葉が発生しているような考え方の代表として方言区画

論を解釈し、自分の方言圏論を1つの日本語論の代表とし、対立させて論じているように考えられる。そして方言区画論に対する批判を向けている。改訂版の序には次のような文言がある。

それよりもさらに心得難いことは、この圏論と対立して、別に一つの方言区域説なるものが有るかのごとき想像の、いつまでも続いていることである。今からざっと四十年前、まだ方言の実査の進んでいなかった時代に、中部日本のある川筋を堺にして、東と西では概括的な方言のちがいが有ると、言い出した人たちが大分有った。是がもしその通りなら大きなことで、あるいは方言以上、もとは相似たる二つの言語というような結論にもなり兼ねぬのであったが、その推定を支持するような資料は、今になっても格別増加しておらぬのみか、むしろ反対の証拠ばかり現れている。(p5-6)

以上述べるように、東西方言の差が二つの言語の存在につながると言い、その差を否定している。

柳田の方言区画論への嫌悪は、次章以降の内容に関係してくるものである。しかし、本来は蝸牛という、ある語彙の全国的分布を各地の方言集や古典の文献、あるいは通信調査を用い、あくまで客観的データに基づいて分布図を鮮やかに示した柳田と、方言理論に関し時に感情的な、主観的側面を露わにする柳田とでは、論の統一性から見ても、異なった印象を受けるのである。

こうした柳田における多様性は、この人物の学問範囲の多様性にもつながり、その結果多くの研究者の関心を引き付けてきたといえる。その反面様々な解釈や見方が可能であるし、柳田の書き方そのものが、客観的な判断を内在的に拒むような述べ方を行っていると考えられることもできる。

言語に関する文脈において、田中克彦は以下のように、的確な指摘を行っている⁽³⁾。

ソシュールのおかげで、言語学という表札がかけられ、そこに予算がふりあてられるようになったのである。(中略)柳田にとっては、そんなことは必要でなかった。言語学にとっ

て必要であった独立領域の劃定は、むしろことばの生きたすがたをゆがめるものでさえあった(p110)

ソシュールは現在に続き言語学を確立した言語学者であり、様々な学問から独立した言語学という学問領域を設定し、そのための言語学的道具立てを生み出した人物である。言語学の教授としてジュネーブ大学などで教鞭をとったソシュールと元々官僚で、一般的な日本人の文化に関心を持つ柳田では、学問の目的から大きな違いがあった。言葉の研究者といっても、言語学プロパーではない柳田は、言葉への考え方も自由である。

田中は、柳田の言語論が言語イデオロギー批判を強く含んでいることで、言語学畑からはあまり扱われないとも述べている。前述の方言論に関する言及のように、時に主観的要素を打ち出すその書き方は、あくまで客観性を重んじるという言語学的立場から扱いにくいことは疑えない。

だが、そもそも昔から続く日本文化を全体的に扱うことを目的としていれば、言語学としてどう捉えられるのかなどあまり重要な問題ではない。その上、言語に対する前提条件が異なっている。この点、田中は次のように指摘する。

共時論からただちに想像されるように、近代言語学は、多少誇張して言えば、言語を変化しないものとして見ようとする。変化は体系に属するものではないというたちばをくり返し述べたソシュールにとって、まず第一の課題は、変化しないことばを得るための手続きの承認を求めることであったが、柳田にとっては、ことばが変化するというこの点こそがすべての出発点であった。(p112)

この引用から、田中は言語学と柳田を言語変化の点から対照的に捉えていることが分かる。しかし、上記引用の、言語を変化しないと見ようとするという近代言語学の考えは、主にソシュールの後期の思想から発生するもので、言語学の歴史の中でも比較的新しい捉え方である。まして、言葉の変遷そのものを研究対象とした柳田にとって変化しない言語という捉え方は、自分の興味関心か

らも研究対象からも外れたものであり、否定的意識が働くのは当然だと考えられる。

田中の文脈の言語学と言語地理学でも、やはり目指す方向が異なるといえる。言語学という括りの中にも実際は様々な主張や目指すものがあり、柳田のように言葉が変化することを前提とした捉え方が存在しても不思議ではないだろう。

しかし、多様な研究の在り方を認める立場を、方言論の引用に見るように、当の柳田本人は否定していたと思われる。自分の考えにマイナスになるような主張は否定しようという動機が働いているともいえるが、自分の主張に対しても潔癖な態度で臨み、昔の考え方を消し去ろうとする姿勢などを生み出すことにもなるのである。

ここまで柳田は変化する言語を調べることを目的とし、その代表例として蝸牛考(方言学的業績)があることを述べた。ところで柴田はチューネン『孤立国』に言及している。農業立地について書かれた本であり、言語を扱ったものではないが、熊谷康雄の「柳田がチューネン圏を単に中央から周辺へと並ぶ同心円の配置として図形的に理解しているのではなく、チューネンが『孤立国』において示した法則のひとつの(あるいは典型的な)実現形として同心円を捉えているということを意味する」という指摘のように、ある法則やモデルとそれの実現した形を合わせて物事を掴む発想を、言語地理学に触れる前から抱いていたと考えることができる⁽⁴⁾。熊谷は『孤立国』が科学的著作である点も述べるが、科学的方法によりある現象の成立をモデル化する手法に柳田は魅せられ、方言の一つの語彙で実証したわけである。

しかし、柴田は蝸牛考の解説で、方言の通信調査の際にナメクジやカマキリなども扱ったが、周囲分布を示さなかったはずなのに、蝸牛考で触れていないことを指摘している。実のところ、周囲分布は方言語彙の全てに当てはまる法則ではないことに当初から柳田は気づいていて、法則に適合するものを自分で選択し、示したことになる。

科学的な研究への志向を抱きながら、その限界を認めたがらないという一面が存在したと考える

こともできる。ある理論を、可能な限り普遍的な法則と捉えようとする姿勢なのだが、理論と現実の間で揺れていた、研究者としての柳田の一つの側面を示しているともいえるのである。

そして、日本語を超えた日本研究に対する理論が行き着く先として、次節で扱う、一国民俗学的発想が存在する。この発想は、民俗学の枠におさまるものではなく、柳田の後期の思想を覆う、それだけ問題の多いテーマでもある。

3. ‘一国’ という設定について

柳田國男と聞けば民俗学の名が連想されるように、柳田の学問の中心が民俗学なのは周知の所であるが、一般的な民俗学者ではなく、社会科学的な目的を抱いていたことは、例えば、藤井が以下のように指摘している⁽⁵⁾。

「経世済民の学」としての柳田学という自己規定は、‘柳田民俗学’の通称でしられる彼の「郷土研究」もまた、じつは社会政策学派の経済学を彼なりに発展させたものであったことを含意する。すなわち、‘柳田民俗学’は‘柳田農政学’の延長線上に位置し、それを深化させた学問なのであった。

柳田の膨大な学問業績には様々なものがあるのだが、経世済民と述べているように世の民衆を救うための学問という意識が自身にあり、国語や社会に関する教育的業績もその趣旨に沿って進められたものだった。中でも特に後半は民俗学の業績が中心となっていき、上述した柳田の日本語研究も民俗学と強く結び付いたものと捉えられる。

その、柳田民俗学の特徴を示すと広く認識されている用語に<一国民俗学>がある。この用語は1934年出版の『民間伝承論』に「第一章 一国民俗学」とあるように(初出はもう少し前)、蝸牛考と同時期の昭和初年に成立している⁽⁶⁾。ただ、明確な定義づけはなく「私たちは実着の歩みを踏みしめて行くために、特にまず一国民俗学の確立を期し、これによって将来の世界民俗学の素地を用意し、(p268)」「我々はどこまでも文献は参考にはするが、この学問の性質上証拠とすることを避

けたい。この用意の下に一国民俗学が各国に成立し、(p299)」といった表現がなされている。

世界の民俗学を目標とはしても、それぞれの国で民俗学を成立させることを重要視していることが分かる。当然、日本における民俗学がテーマになるのであり「日本民俗学(p280)」という用語も『民間伝承論』には登場する。

‘一国’という限定した言葉の響き、また、帝国日本が大戦へと向かっていった戦前の時代状況も相まって、一国民俗学という概念は柳田の政治性と関連させて議論を呼んだことがある。民俗学を一国、つまり日本に限定した際、当時の状況では、朝鮮や台湾を切り離すことになる。この峻別に、官僚だったという経歴も踏まえ政治的意図を暴くという主張だった。本論では深入りしないが佐谷の以下の論に従う⁽⁷⁾。

とくに一九九〇年代には、村井紀や川村湊、子安宣邦、小熊英二らによる批判が相次いだ。これらの批判については、岩本通弥や赤坂憲雄、佐藤健二らによる周到な再批判があり、議論としてはすでに決着を見た感がある。

柳田や、国語学者だった時枝誠記などの植民地政策の一端を担っていた責任を明らかにするという試みは90年代に盛んだったが研究者の政治的意図等への再批判を経て、今ではあまり触れられなくなっている。だが、国語政策、言語政策は教育的・政治的テーマであり続けるし、藤井の指摘にあるように、柳田の学問を政治的問題から分離させるのも本質を隠してしまう。一国という括りは、多様な問題を含んだ主張なのである。

前章で見たように、方言圏論を打ち立てた際柳田は日本各地を方言の観点から区割りしていくいわゆる方言区画論に対し、やや感情的文言を込めた批判を述べていた。日本を区分する考えへの批判の下には、一国で物事を考える態度を貫こうとする決意をも感じ取ることができる。

赤坂は、次のように述べ、方言区画論の排除は柳田にとって必要だったと考えている⁽⁸⁾。

“国語の統一”のために働いていた柳田の前に、方言区画論はまさに、存在を容認しがた

い敵対者として現れたのである。アイヌ語という異分子の影にいたっては、この昭和初年の柳田がもっとも強く忌避せんとしていたものであったことを、想起しておく必要がある。国語＝日本語とアイヌ語とのあいだに、決定的な裂け目を穿つことは、あの東／西の方言領域の境界を突出させることなく、ひとつの国語の内なる地域偏差として押さえ込むために不可欠な、前提作業の一環をなすものであった。(p264)

柳田の考え方は年代によるばらつきが大きく、前期の遠野物語を執筆した頃は、山人やアイヌなど、常民とは異質な存在を織り込みながら、日本人や日本文化についての論を形成していたと考えられる。赤坂の指摘のようなアイヌ(語)を異分子として排除するような考え方はなく、また、前期の柳田であれば、蝸牛考のような考えを形成することはなかったように思われる。

赤坂は、国語の統一のために働いていた柳田という言い方をしているが、一つの国語というのは一国民俗学的考えからの派生といえる。それでは一国民俗学とは一体何なのかということに関し、佐谷(2015)に、以下の指摘がある。

「日本語」の通じる範囲に共有されている文化こそが、柳田の研究目的であった。(中略)アイヌ語と日本語ではもちろん言語がまったく異なる。それに比べれば琉球語とはより共通性があるが、それでも日本語とは異なっている。だから柳田にとっては、北海道や沖縄を含む、日本全土が「一国民俗学」の範囲なのではない。(中略)柳田民俗学はあくまで、日本語に依拠した研究をめざしていたのである。(p151)

「一国民俗学」は朝鮮や台湾は日本ではないという暗黙の前提を含む概念だ。それは朝鮮や台湾を差別するためではなく、それらの地域の固有文化を尊重するためである。(p152)

日本語という言語があり、その上で言語に基づいて民俗学的研究の範囲が設定される。それは、言語が文化の及ぶ範囲を規定し、生活の営みのエ

リアも自ずと定まってくるからである。

すると、一国民俗学というのは、直接はドイツ民俗学(Volkskunde)の影響で成立したとしても(佐谷等参照)、結局は言語の違いが民俗学の境界を設定するという、言語学の基盤の上に成り立つ学問ということになる。岡村民夫は「一国民俗学とは、つまるところ一言語民俗学である」と述べたが⁹⁾、言語的民俗学という内実を、短く的確に指摘した文と捉えることができる。

この指摘はその通りなのだが、言語と国語は同じではなく、国語とはあくまで特定の国・国家が存在しなければ成り立たない概念であり、その点で質が異なっている。先ほど引用した赤坂の文で柳田の論に対し「国語＝日本語とアイヌ語」と述べていたが、言語の立場からすると当然、日本語もアイヌ語も一言語である。日本語に対し国語という価値を付与できたのは、日本が国家としての体を成していたことに加え、国語教育を明治以来行ってきた実績があったからである。

逆に、アイヌ語は言語ではあってもアイヌ国家は存在せず、国としての民俗学を成り立たせる土壌は無い。アイヌ語を日本における異分子と捉えようが捉えまいが、国家の後ろ盾の有無で、一国民俗学においては初めから決定的な裂け目が存在していたと考えられるのである。

では、一国民俗学ではなく‘一言語民俗学’といった学問が成立することは可能なのだろうか。純粹に言語を基盤にすれば、あり得るだろう。日本の民俗学は母語話者である日本人が行うのが基本という考えからすると、少数言語でも、母語話者が自分の民俗を研究すれば良いのである。

だが、そこで問題になるのは文字表記である。民俗学に関わらず、どんな学問でも、その成果は文字によって発表され、残される。だが、全ての言語が文字を持っているわけではなく、ましてや現在、実際に使用される文字は言語の数に比べればかなり少ない。文字を有し、実際に通用させるには、それなりの規模の国家が存在しなければならない。民俗の基本は言語にあるというのは、言語が社会の基盤である以上正しいが、学問として

の民俗学を考えると、その正しさをそのまま押し通すことができない。アイヌの民俗学を打ち立てるとしても、それを書き記す文字は日本語や英語なのであって、結局、無文字言語の話者の一言語民俗学といったものは成立しないことになる。

言語を重んじ、日本語に基づく日本の民俗学を確立しようとしたのには、ヨーロッパに対する反発があり『民間伝承論』に以下の記述がある。

白人以外の人種の中にも多くの資料のあり得る学問を、白人の間の言語のみによった資料を見てわかるはずはない。我々からいえば、この学問に重要な役割をなし得る日本を除いて、何の国際書誌ぞである。(p346)

ここにはヨーロッパ系言語以外の日本語による学問への気概が現れている。これは、純粹な学問的動機というより、柳田自身の体験による心情の変化が大きい。その体験は、ジュネーブでの国際連盟委任統治委員の仕事である。

第一次世界大戦後に国際連盟が成立し、そこで植民地に関する委任統治制度が成立し、日本からの委任統治委員として柳田が選ばれ、連盟本部のあったスイスのジュネーブに赴くことになった。彼の国際連盟での仕事は1921～23年に及び、その体験が以後の学問に与えた影響は大きく、岡村や佐谷などの詳細な研究も行われている。

簡単に言うと、国際連盟の仕事では、英語やフランス語が使用されるが、そうした言語の会話能力にそれほど長けていたとはいえない柳田は、なれない異国で孤立感を深め、言語の重要性を嫌というほど認識させられたということである。

言語が異なることの生活に与える影響の大きさを、身を持って体験したことになるが、そこからの歩みを凝縮したキーワードが‘一国’なのである。英語やフランス語と違う日本語による学問の樹立、そして、朝鮮語などと境界線を定め、日本の民俗学の範囲を地理的に決めることである。その際、方言圏論の範囲が及ぶところまでが日本のエリアであると捉え、言葉の面から一国の境を樹立した『蝸牛考』は、一国民俗学の下支えとして、重要な意味を持つといえるのである。

ここまで一国という概念を通じ、柳田における言語の重要性を述べてきた。蝸牛考という方言学の業績は重みを持っているが、その主張の疑問点に関し次節で取り上げながら、単一性と多元性という観点から、更に考察を進めていく。

4. 柳田の単一性と多元性に関する議論

2節で、柳田が方言区画論を否定したことを見た。それでは、その否定にどういった意味があるのか。それを考えることは、柳田の国語教育観の考察にもつながっていくと思われる。

蝸牛のように何らかの語彙が文化の中心から広がる現象は、広がる範囲がその言語の及ぶ範囲を示すことでもある。本州の北から沖縄までが蝸牛の調査対象で、その対象範囲はそのまま方言区画論の範囲と一致する。方言区画論では北海道についても言及されるようになるが、本州からの移住者の定着が進んだからであり、調査対象の範囲としては柳田の考えと矛盾するものではない。

区画するというのは、あらかじめ区画すべき対象が定まってい始めて成り立つ行為である。方言区画論というのは、日本語の方言というのがどこからどこまでかを暗黙の了解として成り立つもので、そこから話が始まる議論である。実際のところ、方言区画論とは日本語の及ぶ範囲がどのように規定されるかにはあまり疑問を持たないまま一日本語の範囲という問題を度外視して一考察が進んでいった学説だといえる。

方言区画論とは、一つの国語から成り立つ論であり、それこそが柳田の考える通りの論ではないのだろうか。赤坂は、方言区画論が日本語の単一性を脅かす、アイヌ語のような存在を包括し得るような述べ方をしているのだが、方言区画論のどこからそのような考えの生じる余地はないし、アイヌ語の影響を盛り込んで方言区画を規定しているような考え方も見受けられない。

これに関連し、真田(2011)では、以下のように述べられている⁽¹⁰⁾。

柳田國男が多元論として批判した方言区画論、すなわち日本の比較方言学は、対象を日本語

に限り、そのそれぞれの方言が同一の言語体系から分岐したものと見なし、その方言体系を比較することによって、日本語の祖語を考え(中略)そのベクトルは、実は柳田における「ひとつの日本」への志向と同様のものといえる。その点において、柳田の論難は的外れであったと言わざるを得ない。

上記引用に述べられる、柳田の方言区画論への批判が的外れだったという真田の主張は、日本語の方言を同一の言語体系の中の差異と捉える方言区画論の骨格を理解していれば、当然の指摘だといえる。柳田の方言区画論に対する態度は、2節の柳田の文章から分かるように、感情的な批判で終わっている印象を受けてしまう。

しかし、この批判を感情論で解釈することは、やはり問題だと考えられる。柳田の方言区画論への批判の中心は、主に次の2点にある。

①一つの日本語を暗黙の了解とすること

①は、日本語が一つであることを方言区画論者が自覚的に織り込んでいないことへの批判。

②方言区画論が区画論として成り立つための条件付けを東條操などの方言区画論者が行っていなかったこと

②は、方言区画論者(主に東條操)が自身の研究に関する理論を構築しないままに議論を進めて行ったことに向けられていた批判である。

そして、日本語が日本語であることを成り立たせる議論が必要だと感じていた柳田だからこそ、周囲論というフランス由来の考え方をすぐに受け入れ、蝸牛考を著したと考えられる。たまたま蝸牛という語彙が象徴的に使用されているが、全ての日本語の語彙や文法が周囲論的に成立する必要はなく、実際に語彙を選定した上で蝸牛考は書かれている。ある程度、周囲論的に成り立つ現象が存在すれば、日本語の範囲、ひいては日本文化の地理的な境界線を引くことができるのである。柳田が日本語論を考える上での前提条件としては、ある程度の成立で構わないのである。

周囲論が成立することが確認できれば、それぞれ設定された地域の範囲において、方言区画論を

成立させることはそれほど矛盾ではない。

そう考えると、区画論というのは圏論の中において論じられるテーマのようにも考えられる。例えば、東北地域でアイヌ語由来の地名が多く、それを区画論の区分分けに使用しても構わない。アイヌがいた地域に日本語が取って代わったが、地名にはアイヌの痕跡があり、一つの日本語の中における日本語の多様性がそのように存在することもある、というように。

蝸牛考が成立したのは、多元的な日本という考えを捨て去って、一国民俗学にまい進していた時期の柳田だからこそ成立した業績と考えられる。一つの日本、一つの日本語というものを何らかの方法で成り立たせることに躍起になっていたのではないか。ただし、90年代の柳田批判で言われた朝鮮や台湾の切り捨て、まして帝国主義者というものとはかなり異なる発想である。

大正期に国際連盟委任統治委員としてヨーロッパで暮らした柳田は、言語が通じることの価値の大きさを相当に自覚したと考えられる。蝸牛考は帰国後に発表されているが、その時期の柳田は、他言語を使用する人がどこかの国の文化を調査すること、その行為に対し帝国主義的危険性を感じ台湾などの植民地に対する民俗学の波及には禁欲的だったといえる。ここでも、柳田の自分の考えに対する潔癖さを読み取ることができる。

そうなると、例えば鹿児島の方言をあまり知らない青森出身の研究者が鹿児島の民俗を調べるとも、やはり問題だということになる。方言圏論は、単語の源流は一つであることを示しているが、それは通時論的—過去—の話であり、共時論的—現在—としての地域差は依然存在している。〈一つの日本語を歴史的に担保すること〉＝〈現在の一つの日本語を証明すること〉に、必ずしもなるわけではない。こうした、言語の単一性と多様性をどう折り合いをつけるのかは日本語学的にも、自覚すればするほど根深い問題である。

方言区画論への根本的な批判を、中俣は次のように述べている⁽¹¹⁾。

東條区画論の本来の通時的関心が、地図とい

う「共時的」表現手段を用いて表現されたことで、先に述べた「倒錯」、つまり「場所による言語の違い」から「言語による場所の違い」へという関心の変化が起こったのである。区画することのできない方言が、区分図というかたちをとって表されたことによって、区分されるべき対象が、言語ではなく地域になっていた。

ここで「区画することのできない方言」と述べているが、つまり方言の差とは、人間の言葉が各土地の生活圏により差が生じるとは言えても、日本語という言語自体を、土地を基準として質的に区画するのは不可能であることを指している。

方言区画論とは、ある意味日本の生活圏を言語的に分けしただけの地図のことで、結果的に、共時的に日本がまとまった生活単位を成していることを表したものであり、一つの日本という現代社会の生活文化を反映させた論と捉えられよう。

方言区画論が日本の多元性を示すといっても、それは一つの国という括りの中の差であって、別言語と指定されるような違いを示すものではないし、そもそも別言語という発想は区画論には存在しない。だが、やはり日本語が一つの言語であることを証明する道具がないことになる。

柳田は、京都からの伝播が長い時間、通時的に行われたことを以て、日本語の質的な統一性を保とうとする。特定の語彙であっても、その成立が日本語の単一性を歴史的に担保したとみなすことは可能ではある。言葉の違いを、一国の枠の中に止められる理論を成立させたことに、意味を見出したのだと捉えられよう。そして、日本語が平仮名・カタカナ・漢字等による、自国語の文字表記をしっかりと成立させていたことが大前提となる。書き言葉の統一が以前からできていたというのは、国語教育にも関わる事柄である。

また、過去の単一性を、不十分ながら明らかにしたとしても、現在や将来の不統一性は揺るがない。その解決には、国語教育という別の道具を持ち出すよりない。国語教育は、一国という枠を持った学問の確立にも必要であり、国の統一という面

からも欠かせない観点である。そこに、柳田の根底にある、民衆の暮らしの向上のための教育という視点も絡んでくる。ここまでの柳田の考えと日本語学的論点を踏まえ、次からは、国語教育論についての考察を進めていくことにする。

5. 柳田の国語教育と標準語の捉え方

国語教育学には、教育的見地と国語(日本語)の捉え方という2つの側面がある。近年は、日本語学(国語学)と国語教育学との差が開いている印象があるが、昔はより密接に関わっていたといえ、本論で扱っている柳田は国語の教科書を手掛けるなど、積極的に国語教育に関与していた。

柳田が、国語に限らず教育全般に大きな関心を抱いていたことは、これまでの研究でも多く指摘されているが、彼の生涯と学問的展開を踏まえつつ、教育に関する業績の意義に焦点を当て考察した関口は、次のように総括している⁽¹²⁾。

柳田の「学問」には、〈「国民総体の幸福」の増進〉という農政学以来一貫した課題意識がある。(中略)そして自己の「学問」を展開する過程で、国民の主体形成に対する課題意識を明確にし、主体的な国民の育成と新しい協同の創出をめざす教育構想を展開したのだと考えられる。

ここで言う主体的な国民の育成とは、国民自らが自分の意志を持って行動するイメージを含んでおり、明治以来の政府主導の国民国家形成とは異質でもある。元々官僚だった柳田なら、政治の世界に踏み止まり法律の立案や自分が政治家になり政策を進めるという道もあったのだろうが、結果的に学問の世界に移っていったのは、国民が自ら物事を考えるための道標として民俗学等の学問を示すことが不可欠だと感じたからだといえよう。教育についても子どもが自ら考える場として学校を形成するため、考察が必要だったのである。

前節までで述べたように、言葉の重要性を認識していた柳田にとって、国語教育は教育問題でも社会科と双璧を成す関心事であり、戦後の教科書編纂は、国語科と社会科にまたがっている。

では、国語教育において何を重視していたのだろうか。関口(1995)は「主体的な国語能力＝〈考える言葉〉の育成が一貫して主張された(p157)」と述べている。そして、話し言葉の教育を重視していたことを踏まえ、以下のように述べる。

柳田の主張は、国語能力の基礎になる聴く・話す能力を十分に育てずに、読み・書きによって国語を教えることができると考えられていた点、方言が地方人にとってどのようなことばであるかも考慮せずに、不完全なことばである標準語を強制しようとする点に対する問題提起であった。(p179)

こうした指摘から、国語教育論において方言や標準語の問題が深く結び付いていることが読み取れる。前節までの考察を踏まえ、各テーマの関係性について見ていきたい。国語教育について柳田は次のように端的に述べている⁽¹³⁾。

緊要なる一点は、何が国語教育の成功であり、国語発達の兆候であるかを、最も明確に知っておくことだと信ずる。字が上手、読み方が達者などはもちろん末の末で、目的は各人が口でなり筆でなり、自分の言おうと思うことがいつでも自由に言われて、しかも予期の効果を相手に与えることでなければならぬ。

自分の思いを伝えられることを目的としており考える言葉と話し言葉の重視がうかがえる。ここには「筆」という単語があるが、文章能力も含めて効果的に伝えることを目指していたといえる。

上記の引用で述べられているように、柳田は考える言葉と伝える言葉とをセットに捉えていたわけ、どちらか一方のみを重視していたのではない。しかし、日本語における伝える言葉の現状に問題があると感じ、改良しなければならないという意識を抱いていたことは、戦後に発言された、以下の文章からもうかがえる⁽¹⁴⁾。

国をもう一段とよくする手段としては、文語を全廃してしまって、日常もう、われわれのつかっていることばを、すぐ消化できるようなことばにしてくれればいい。

この発言は国語と選挙を絡めた文脈でのもので、

選挙との関連で日本語を考えるのは柳田独特の問題意識だが、話し言葉の文章化といった事柄をも想像しているようである。難しい単語ではなく、平易な日常語で生活できることを望ましい状態と考えていたと捉えられる。

上記のような考えは、明治以来の言文一致運動の延長線上にある。柳田の名前を世に広めた『遠野物語』は1910(明治43)年に書かれたが、その出だしは「この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり」というもので、擬古文体で書かれている。その頃は夏目漱石が世に出た頃で、口語体の文章化が浸透しつつあったが、それに比べると未だ伝統的文章にとどまっていたといえる。

この時代の、標準語をもって国の言葉の統一を図るという国語政策による標準的な話し言葉を基に文章の言文一致を進めて標準語を浸透させる政策には、方言だけでなく、文語体の排除も含まれていた。そうした標準語政策と、遠野物語の頃の柳田には距離があったが「しかしながらジュネーヴ以降の柳田にとって国語問題は一国の存亡に関わる不可避のテーマであり、明治後期以降の標準語政策に対する批判と自身の国語観を表明する時がやがてやってくる。」と指摘されるように⁽¹⁵⁾、外国生活が一契機となったと考えられる。

ここでは遠野物語という文章を例にしたが、標準語の問題とは、結果的に、話し言葉の問題に絞られる。柳田は「第一に、国語の不統一は、文語の問題ではなくして口語の問題である。(中略)文章は始めから統一している。」と述べ⁽¹⁶⁾、文章については問題にしていない。擬古文体か口語体で書くかは、実際には、統一されている文章を話し言葉に近づけることで済む話だった。

それよりも、文章の元にもなる、話し言葉が不統一である状態が問題であり、それを統一することは、方言の扱い方にも関わってくる。蝸牛考のような方言学の業績もある柳田が、方言の存在を認めていたことは事実で、先行研究でも以下の指摘に代表される見方が一般的である⁽¹⁷⁾。

柳田は、トップダウン式による性急な標準語制定は決して常民のためにはならないと考え

たのだ。それは、標準語では自分の考えを十分に展開できないからであり、方言の方が自分の意を展開するのに適しているからである。柳田に言わせれば、標準語よりも方言の方が語彙・句法・表現とも豊富であり、常民の生活にも根ざしているのである。

標準語では自分の考えを十分に展開できないとは、結局、標準語は方言と同じレベルの話し言葉になっていないことに起因する。柳田の考えでは話し言葉にも様々あり、中でもよそ行きの言葉として「晴の言葉」があるとしていた。形式じみた挨拶や演説、祝いの言葉などで、いわば着飾った言葉である。そして明治以降の言葉の変化を含めて、次のように捉えている⁽¹⁸⁾。

しかも結局は前のものが先ず退き、後に残ったのは間に合せて簡略形ばかりとなって、到底新時代の文化を装うにも足りぬような、粗相な晴の言葉が標準語視せられるに至ったのは情けないことであった。(p48)

晴との二種の口語の差別は、今日はもう心付かずに居る人も多く、従って其境目が可なり入乱れて居る。我々の日頃念願する国語の円熟というのも、畢竟はこの二つのものの近接、成るべく障碍少なく相互に行き通うことを期するのだから、人と争ってまでも強いて古来のけじめを立て通す必要は無い。(p51)

‘け’の言葉とはより日常の話し言葉であり、標準語と方言の関係に対応できる面がある。無論方言の中にもよそ行きの挨拶などはあるが、自分の気持ちを率直に表すレベルでの話し言葉は性急につくられた晴の言葉のような標準語ではない。

普段の着飾らない言葉にこそ話し言葉としての意義を有するのである。言葉においてハレとケの区別を見出すのは民俗学者としての柳田の面目躍如だが、常民＝一般大衆の言葉に国語問題の本質があることを見抜いた上での指摘といえよう。

以上、話し言葉の内実を標準語問題と合わせて柳田が考察したことを述べた。本節で、柳田の国語教育の目標について、考える言葉の育成を目指すものだという関口の指摘に触れたが、考える言

葉の中身とは何だろうか。それは、文章語や生活と離れた言葉ではなく、より生活に即した言葉である。ただ、その生活に即した言葉が方言でなければならないかという、そうではない。すでに一国という枠の中の学問という彼の捉え方を考察したが、その枠を重視すれば、内部は統一されている方が良いという見方もできる。現に、柳田は言葉についても統一されるのが理想的だと考えていることが、以下の文章からも分かる⁽¹⁹⁾。

一国のものの言いが、一つの標準語に統一せられるということは、何よりも望ましいことに相違ないが、それにはぜひとも安全なる方法を伴わなければならぬ。学ぶ者をしてまずあらかじめその一語一語を体験せしめ、常に標準語をもってものを考える習慣を、養わせることが絶対の条件である。

標準語で物事を考えることができるようになるには、それだけ標準語が生活に密着し、小さい時から日常生活において使いこなす言葉になる必要がある。そのような意味を有する標準語は、すでに一般的な意味合いで使用される標準語とは別の存在であり、国が押し付ける言葉ではなく、人々が自発的に身に付ける言葉である。つまり、方言にとって代わる、日本中に行き渡る生活言語という意味で標準語が広まるのが理想だと考えていたわけで、その点、現在の感覚では、共通語と捉えた方が理解しやすいと考えられる。

上からの押しつけではなく自主的に統一するのが望ましいと考えていたのであり、やはり日本語がどこでも同じように話されるのを将来の理想としていたことになる。しかし、その理想を性急に実現させようという考えは一切なく、その当時の標準語と方言の混合を肯定的に捉えているし、方言を無くすような教育は拒否している。

柳田には「新たに地方の言葉の有力なものが、採用せられて行く場合は必ず多いだろうと考えられます。すなわち方言は言わば未来の標準語の素材なのであります」との文章もある⁽²⁰⁾。方言を組み入れた標準語形成は、東京の言葉を基準に考える現在までの見方には存在しないもので、方言を

含めた＜単体としての日本語の形成＞を将来的に考えていたと思われるのである。

このような統一された日本語は、本当に存在可能なのか。そんな疑問に、柳田はすでに回答している。それが、すでに扱った『蝸牛考』の方言周圏論である。周圏論とは、ある語彙の調査に基づき、日本語なら日本語の範囲がどこまで及ぶかを確認する作業仮説とも捉えられ、また、その語彙が文化の中心点から波及することから、現在では異なりが生じている状態であっても、根が一つであり、元来は同じ言葉であったことを証明するための理論でもある。突き詰めれば、日本語の統一性を歴史的(通時的)に担保するための理論として大きな価値を有する学説である。

そして、柳田が方言区画論に反対していたこともすでに述べたが、日本語が元来地域により差があると捉えられるような学説を認めるわけにはいかなかったのである。歴史的に見ても日本語は一つであるという主張が、自分が理想とする統一された言語状態をあり得るものと認め、かつ、上からの押しつけではなく、元をたどればそれが自然なのだと考えたからだと思われる。

しかし、いくら元はある地点からの派生だとしても、現実にある差は消えない。通時的な捉え方を共時的な問題に広げるのは限界がある。柳田の一国の境界を設定する考え方からすれば、その内部に様々な変化や違いがあっても、要はその違いがある統一された存在の中の違いだと認定できればそれで良いのである。その点で、蝸牛考の趣旨は、京都を中心とした日本語の及ぶ範囲を設定できたことで、日本語の境界の策定には成功したのである。その内部をどう捉えようが、他の国とは関わりがなく、日本というフィールドの中で学問を展開できることになる。その土台の上で、一般の人が自発的に言葉を統一していけるような動きをすることが大切である。

一般の人々を足場とする柳田の立場では、教育も強制的なものではなく、自発的に行うのが理想的である。江戸時代などの昔の国語教育について述べた文章があるが⁽²¹⁾、言葉遣いを間違えと周り

の子ども達に笑われるといった経験を経て、正しい言葉を身に付けていったと指摘する。

国家の権力ではなく、周りの人との関わりの中で言葉を覚え、身に付けたかつての日本の教育の意義を再発見したもので、民衆の自発的教育を重んじる点では一貫している。あくまで、民衆の手による社会や教育の会量を目指していたのであり権力を排除し、学問的見地を基盤として教育などを展開しようとする、潔癖さを感じさせる姿勢を国語教育においても感じることができる。自分の理論を貫きながら実践を模索した柳田の姿が捉えられると考えられるのである。

6. おわりに

本論では、柳田國男を例にしながら、日本語学(国語学)と国語教育学について述べてきた。柳田は、手がけた学問領域が幅広く、民俗学的観点からの考察も必要な点で、一般的な日本語研究者に比べ様々な論点があると思われる。また、国語教育学というのは、根本的には実践に基盤を置く分野であり、言葉を理論的に究明する言語学に基づく日本語学とは目指すところが異なっているが、ある日本語の理論を基盤として教育を進めるのは必要な事柄であり、その一つの実践例と捉えることができるのである。

柳田の学問を語る上で、一国という用語により境界線を定め、学問の範囲を設定した点が重要であることは、本論で確認してきた。一国民俗学という用語は一般に知られているが、言葉に関して「一国言語学」と、次の文脈で述べている⁽²²⁾。

何が一国言語学の成功であるか、または少なくともその進歩を意味するかということである。(中略)日本語が今よりもさらに遥かに優れた国語になること、言いかえるならばおたがいがもっと自由にかつ快く、思った通りを言い現わした聴き取ることを得ようになること、それより以外に何か別の目的があるろうとは、私などには考えてみることもすら出来ない。

一国言語学の成功が、互いに自由に思った通り

のことを言い現わせるというのだが、これは国語教育の目標と重なることである。この文脈でいう言語学は、将来の言葉の変化の結果を志向したもので、田中克彦が述べたような変化しない共時的言語を問題にする言語学とは異質で、実用性を含んだものとなっている。こうした主張からも柳田の学問が実用性を目的とするプラグマティズムの基盤に立っていることがうかがえる。

その点で、彼の方言を中心とした言語(日本語)学は、実践を目指した国語教育と同じベクトルを向いていた。だからこそ、両方の分野で業績を上げたのだが、蝸牛考により日本語の基礎的な視野を確立しなければ、それ以後の国語教育論は成立し得ない。あくまで何らかの理論に基づいた実践を行うこと、その理論に可能な限りこだわり続けることが柳田の学問的流儀だったといえよう。

上述した一国言語学に関し、子安は以下のよう⁽²³⁾に指摘している。

「一国言語学」といったいいかたは、「一国民俗学」を主唱する柳田によっていわるべくしていわれたことばだということができる。「一国言語学」の成否を問うような柳田の国語への視線、国語をめぐる発言のうちに、したがってわれわれが追う「一国民俗学」の主題も論理も、その問題性をあらわにする形で示されているだろう。(p26)

国語とは日本の近代が創出する国民的国家語である。だからこそ「国民」を主題とする「一国民俗学」の提唱者は、ためらうことなく国語教育への重大な関心を語り続けるのである。(p30)

国語という概念は近代国家と共にある概念であり、国家による教育制度の浸透により国語も広がる。その際の国語は端的に標準語を指していることは言うまでもない。しかし、国家権力によらずに、あくまで民衆レベルから国全体の幸福を目指すのが柳田の手段であり目的だった。

国によらず国の言葉の統一を図るには、現に存在する方言の語彙をも取り入れ、民衆が自ら使用しやすい言葉を創出するのが理想である。柳田の

考えでは、日本語は元来、統一されていたのだから、権力によらずに日本語を再統一するのは不可能ではない。ただし、書き言葉ではなく話し言葉を民衆全てにとって分かりやすくするには、日本の民衆に広く通じる、柳田が意味する標準語を、時間をかけ広める必要がある。話し言葉の行き着く先は、統一された日本語である。

区画で割られるような異なる存在としての方言の集合体である日本語を保つのではない。

＜一つの統一された存在としての日本語が境のはっきりしている日本の国内に広まり、統一された日本語内部の多様性を肯定する＞

こうした発想を基に、柳田は、話し言葉を重視する国語教育を構想したといえる。

各地を旅し、地域文化に愛着のあったことは間違いないし、方言を否定するような教育には批判的だったことも確かである。しかし、国語教育というのは、国の制度に基づく以上、バラバラな言葉で授業を行うというのは空想的であり、国語教育が言葉の標準語化を求めるのは当然である。

また、言語の実用性を考えれば、誰にも通じる分かりやすい言葉を使用するのが望ましいのも確かである。言語の多様性や少数言語の権利を守ることも叫ばれるが、一方で世界の英語化の波も進み、小さい頃からの英語教育も広まっている。

言語の単一化の波と一線を画し、方言や地方の文化を守ることを主張して教育から遠ざかる方法もあるかもしれないが、国民全体の幸福が自身の学問の根底にある柳田は、学問の実用性を避けることは不可能だった。方言など日本語の様々な異なりを明らかにしながらも、最終的には日本語の統一を目指すという一見矛盾に見える主張も、実は民衆の利益を考え、実利的な結果を求めた学問を柳田が追求したことに起因するのである。

官僚から出発した柳田は、経世済民という目的とも相まって学問においても政治的印象が付きまとう。それを、福井は次のように述べる⁽²⁴⁾。

だが現実には柳田を無視して進んでいってしまう。このとき、リアリスト柳田は現実の側からの攻勢に押されて、ふいと物わかりのいい

顔をしてしまう。そのことが現実と拮抗していると錯覚して。(中略)政治的状况に時に揺さぶられてしまうという意味でも、柳田は「政治的」であったといえよう。

これは柳田の言語政策への考察で述べられたものである。研究においては、時に固執する程に、自分の理論へのこだわりが強いのだが、実際の政策については現実と妥協する面があった。実務家としての柳田が垣間見えるが、理屈だけで物事は進まないことを自覚していたといえる。

国際連盟での職務や朝日新聞論説委員など様々な公職を経験してきた柳田は、大学の中で生きてきた一般的なイメージでの学者とは異なり、毀誉褒貶渦巻く現実世界で生き残る術を心得ていたわけで、「政治的体質」を帯びていたのは当然ともいえる。その分、学問の限界をよく自覚していたと感じられる。ただ、現実世界とは区別された、純粋な学問の領域では、可能な限り理論をもって物事を捉えたいと考えたのではないだろうか。

そして、本論で扱ったように、柳田の日本語に対する捉え方には方言区画論への嫌悪など一見理解し難い主張も存在する。こうした柳田の感情的言動は彼の日本(日本語・日本文化)に対する捉え方が、国内に視点を持つ内的多様性と他国と線を引く外的単一性の間で揺れ動いており、その中で一つの矛盾の表出と捉えることもできよう。

このような矛盾は、日本語を言語的に捉える日本語学と一定の実用的目的を持った国語教育学との間に本来的に生じ得る問題なのかもしれない。だが、学問は民衆の幸福のためにあるという柳田の考えも的外れではない。日本語の事象を考えれば済むとして、日本語学が現実世界から逃げたなら学問の存在意義が問われる事態も考えられる。日本語の知見を現実社会に活かそうとすれば、その道に国語教育が考えられるのは当然である。

ある学問が他分野との連携や発展を目指す時、それまでの研究で生み出された理論をどう捉え、どのような変化を遂げることになるのかは大きな問題となる。その考察の一片を、柳田を例に、日本語の事象と国語教育(日本語の教育)から考えて

みたことになる。また、理論がどこまで現実に耐えるかという課題についての考察でもある。

本論で扱った柳田の場合、一国民俗学の問題など彼の学問の全体像に由来する点も多いが、それぞれの学者が自分なりの理論を基に日本語や国語教育に関し考察を行うものであり、柳田が特殊な例というわけではない。本論での考察を踏まえ、他の日本語・国語教育の研究者の場合がどうか、共通点及び特殊な点を見極めながら考察を進め、事例を蓄積し、日本語学と国語教育学との関わりについての視座を深めていきたいと思う。

文献

- (1) 小林隆編(2014)『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論—』ひつじ書房
- (2) 柳田国男(1980)『蝸牛考』岩波文庫。また、そこに収録された柴田武による「解説」。なお岩波文庫は1943年出版創元選書『蝸牛考』を底本としているが、1930年に初版が刊行されている(元論文は1927年発表)。
- (3) 田中克彦(1982)「言語批判の視点 『国語の将来』『国語史』『標準語と方言』その他」『国文学解釈と教材の研究』27-1, 學燈社
- (4) 熊谷康雄(2014)「方言周圈論の発想とシミュレーションという方法」, 小林隆編(2014)所収, p167
- (5) 藤井隆至(1995)『柳田國男 経世済民の学』名古屋大学出版会, p 5 - 6
- (6) 柳田國男全集28(ちくま文庫), 1990年による。
- (7) 佐谷眞木人(2015)『民俗学・台湾・国際連盟 柳田國男と新渡戸稲造』講談社選書メチエ, p153
- (8) 赤坂憲雄(2013)『柳田国男を読む』ちくま学芸文庫
- (9) 岡村民夫(2013)『柳田国男のスイス 渡欧体験と一国民俗学』森話社, p314
- (10) 真田信治(2011)「日本の方言研究と「ひとつの日本語」」『国語学研究』50, p129
- (11) 中俣均(1997)「方言区画論と言語地域区分」『人文地理』49-1, p28
- (12) 関口敏美(1995)『柳田國男における「学問」の展開と教育観の形成』風間書房, p22-23
- (13) 柳田國男(1985)『国語の将来』講談社学術文庫, p322-323, 引用の初出は1935年。
- (14) 柳田国男(2015)『国語と教育』河出書房新社, p122, 引用の初出は1958年。
- (15) 大野眞男(2010)「『遠野物語』と国語の近代化」『遠野物語と21世紀 東北日本の古層へ』三弥井書店, p96
- (16) 柳田國男全集21(ちくま文庫), 1990年による。引用の初出は1941年。
- (17) 佐野比呂己(2003)「柳田国男の標準語制定批判」『解釈』49(9・10), p53
- (18) (14)の文献。引用の初出は1943年。
- (19) (13)の文献。引用の初出は1936年。
- (20) (16)の文献。引用の初出は1941年。
- (21) (13)の文献所収の「昔の国語教育」。
- (22) (13)の文献, p16。
- (23) 子安宣邦(2003)『近代日本思想批判 一国知の成立』岩波現代文庫
- (24) 福井直秀(2007)『柳田國男—社会改革と教育思想』岩田書院